

Title	中根淑『日本文典』について
Author(s)	山東, 功
Citation	阪大日本語研究. 1999, 11, p. 59-79
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/8613">https://hdl.handle.net/11094/8613</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 中根淑『日本文典』について On Nakane Kiyoshi “Nihon Buntēn”

山東 功  
SANTO Isao

キーワード：中根淑、洋式日本文典、日本語学史

### 【要旨】

明治九（1876）年に刊行された中根淑の『日本文典』の依拠した文典として、主に開成所版『英吉利文典』との関係を中心に検討を試みた。結論として、全体を『英吉利文典』に依拠しつつ品詞分類では、田中義廉の『小学日本文典』を批判的摂取という形式で利用したと指摘できる。

### 1. はじめに

明治初期に刊行された文法書の中には、その内容が主に洋文典に拠っていることから、洋式日本文典と呼ばれている系統が存在する。しかし一概に洋式日本文典といっても、それぞれ参考にしたものは必ずしも同じではなく、英文典に拠ったものや蘭文典に拠ったものなどさまざまである。このことについては既に古田東朔氏によって指摘されているが、<sup>1)</sup> 具体的にどの箇所がどの部分に対応するのかといった詳細な点については、未だ明らかにされていない。

本稿は、明治九（1876）年に刊行された中根淑の『日本文典』について、その原典である洋文典における典拠部分を調査し、その関係について検討を加えたものである。

## 2. 中根淑『日本文典』について

日本語学史上、中根淑の『日本文典』について言及された初期の例は、明治四十（1907）年刊行の福井久蔵『日本文法史』である。この中で福井は「氏が文法は、結構を西洋文典に取りたるは、論なけれども、国語の特性は亦彼と分ち、牽引して伝会に陥らむとを避けたり。」(p.150) と評価している。事実『日本文典』は当時の一般的規範として機能していたらしい。例えば『日本文典』刊行から十年後の明治十九年に、師範学校で採用すべき図書の一つに掲げられており、<sup>2)</sup> 本書が一般的であったということは、刊行後も長く使用されていたことから窺えるのである。

しかし洋式日本文典の「洋式」という性質は、後には多くの批判を生むことになる。文法学説的に言えば、西洋流の品詞論に引きずられ過ぎているという批判である。例えば大槻文彦は『語法指南』(明治22年)において「彼ノ文法ヲ以テ我が文法ヲ論ズルモノ」として洋式日本文典を指摘し、そこでの形容詞の扱いについて批判している。「高ク」が副詞で「高シ」が形容詞である点について、各自を別々の語とした点を批判したもののだが、この形容詞については山田孝雄も『日本文法論』(明治41年)以降一貫して、特に田中義廉と中根淑の文典について、その文法学説的に不備だと批判している。その批判的観点は『国語学史要』『国語学史』の記述にも見受けられる。現在の『日本文典』に対する批判的観点は主に山田の国語学史に拠るところが大きい。<sup>3)</sup>

さて、福井久蔵の『日本文法史』以後多くの国語学史関係書において、『日本文典』を含む洋式日本文典が言及されるようになったが、それらへの評価は現在二分した形になっている。特に英文典へ依拠した点については、それを単なる模倣と見るか、あるいはその枠組み内での独創性に着目するかで、大きく評価が異なる。例えば前者は此島(1976:88)にある「この種の文典は、西洋の品詞を国語におしつけるために、従来国語研究の中心をなして来た辞を軽視してくわしく説かなかつたり、従来作用言と並べて用言とされて来た形状言を無視しこれを解体してしまつたりというような無理を犯している。」といった批判が代表的である。また後者は鈴

木（1976：124）において『日本文典』を田中義廉の『小学日本文典』と共に、国学と洋学という「日本語についての文法研究の、全く異なった二つの流れが合流された最初のものとしての意義が、この二著に認められるのである。」というように評価されている点などが挙げられよう。

しかし、これらの評価において両者に共通することは、何が『日本文典』の独自性であるのかという明確な実証に欠けている点である。例えば鈴木は、『日本文典』の構成が現在の文法書の編目と一致することを指摘しているが、その点は中根の独自性ではなく、英文典を範に採った当然の帰結ではないかと考えられるのである。また品詞分類についても一時期を画したものと評価されているが、八品詞分類自体は『日本文典』や『小学日本文典』において確立したものではない。一方、批判の側についても『日本文典』が何の模倣なのかを明らかにしていない以上、どこまでが模倣でどこまでが独自なものが不明瞭である。また、もしそれが模倣に過ぎなかったとしても、むしろいかに無理なく模倣しようとしたのかという点に立たない限り、過去の研究は全て稚拙なものとして映ってしまう恐れがある。

つまり洋式日本文典の評価については、まずそれが何を参照し何を摂取したのかということから出発し、そこからその文典の独自性や模倣性について考察されなければならないのである。それゆえに本稿は、洋式日本文典全体への評価に対する足掛りとして、まず中根淑の『日本文典』に関係する英文典の影響について検討し、その特質について考察しようとするものである。

### 3. 開成所版『英吉利文典』との関係

『日本文典』が開成所版『英吉利文典』に拠ったものであるということは既に古田（1959 a）で指摘されている。両文典の共通点は、大綱の順序や内容などに見い出されると指摘しているが、ただ具体的な細部については省略されており、どの部分に『英吉利文典』の影響にあるのかが少し判りづらい。また『日本文典』が『英吉利文典』以外にも範を求めていたのかも詳らかでない。それゆえにまず最初は、古田の指摘に従いながら開

成所版『英吉利文典』との関係について詳細に順次検討していくことにしたい。なお開成所版『英吉利文典』にはさまざまな版があるが、内容的にはそれ程異同がないことから、本稿では1867年版を使用した。

### 3. 1. 両書の構成

両書の構成自体が極めて近似していることは、それぞれの目次を対応することからも明らかである。以下に両書の目次を列挙し、その異同を示す。

中根淑『日本文典』

開成所版『英吉利文典』

<上巻>

文典前論

文典大旨

PART I : INTRODUCTION

文字論

PART II : ORTAOGRAPHY

伊呂波

Sounds of Letters : Vowels

五十音

Consonants

濁

Redundant

半濁音

Spelling

諸音合論

綴字

仮名用格

漢字代用

言語論

PART III : ETYMOLOGY

名詞

Noun

代名詞

Verb

形容詞

Adjective

<下巻>

動 詞  
 副 詞  
 後 詞  
 接 続 詞  
 感 歎 詞  
 冠 詞  
 掛 ケ 詞  
 複 語  
 熟 語

Pronoun

Adverb

Preposition, Conjunction, Interjection,

Exercises on the parts of speech

PARTIV : INFLECTION \*

文章論

起語結語  
 転語略語  
 起結転略ノ用例  
 変 格  
文中ノ符号

PARTV : SYNTAX

Rule1~8

Punctuation

Marks and Signs

Parsing

Parsing Table

Parsing Exercises

Cautions

音 調 論 \*

PART : PROSODY

附 録

APPENDIX \*

附ケ仮名  
 送り仮名法則

註) \*の項題は省略した

以上のように下線部分がそれぞれ対応しており、『日本文典』の構成がいかにも『英吉利文典』に拠ったものであるかが窺えよう。なお古田(1959a)は「構成上からいえば、最初の「文典前論」と最後の「附録」とを除いた他の部分の順序が『英吉利文典』になっている。」と述べられているが、『英吉利文典』の“APPENDIX”も本文に対する付録という性質上から、構成全体の観点から「附録」を設けるという点で一致していると見るべきであろう。なぜなら『日本文典』の「附録」は「附ヶ仮名」と「送り仮名法則」について述べられているというように、本文においても指摘できる内容であり、特に「附録」を設ける必然性は内容的には感じられないからである。つまり形式の整合性のために『英吉利文典』に倣い「附録」が設けられたと考えられる。ただ『英吉利文典』の“APPENDIX”が主に副詞の用法に関するものと主要な前置詞・接続詞の列挙であるという点では、両書の内容は必ずしも一致していない。

### 3.2. 本文の比較

本文の叙述構成についても、両書は極めて類似している。『英吉利文典』はQ&Aの問答からなる文法書であるが、答の部分だけを通読することでその内容を把握することができる。それゆえに両書の比較に際しては、『日本文典』が問答式の叙述形式をとっていない点も踏まえた上で、『英吉利文典』については答の部分だけを引用する。(以下の引用文で日本語は『日本文典』、英文は『英吉利文典』の本文である。なお英文の番号は各課(Lesson)毎に最初の答から順番に付けたものであり、各文は本文では“A.”で始まっている。)

#### 3.2.1. 「文典大旨」と“INTRODUCTION”

まず最初に『日本文典』の「文典大旨」と『英吉利文典』の“INTRODUCTION”との関係について検討する。

○①言語ハ元来己ノ思フ所ヲ言ヒ出ス為ノ者ニテ、其ノ初メ衆人相約シテ

以作り創メタル、②音声ノ章アル者ナリ、此ノ音声ニ付スルニ字ヲ以シ、其ノ思フ所言フ所ニ従フテ、而之ヲ記ス、之ヲ文ト云フ、盖人始メテ言語ヲ造スノトキニ当リ、③之ヲ語ルニ一定ノ規則アリテ、前後彼此ノ法紊ルハ事アルナシ、其ノ法ニ従ヒ、字ヲ以之ヲ書ス、之ヲ文ノ法ト云フ、故ニ文ノ法アルハ、即其ノ言語ノ法アルニ由ルナリ、④而謂フ所法ハ、即古來伝習ノ言語、及ビ古昔博士ノ記スル所ヲ以正トナス、⑤然レ共世代悠遠、国土広濶、人或ハ其ノ本源ヲ失フニ至ル、是吾人ノ必文典ヲ講ゼズンバアルベカラザル所以ナリ、

⑥文法ノ書、之ヲ大別シテ四種トナス、曰ハク文字論、曰ハク言語論、曰ハク文章論、曰ハク音調論、⑦文字論ハ、大約文字ノ形ト声トヲ論ジ、言語論ハ、首トシテ言語ノ品詞ヲ論ジ、文章論ハ、重ニ文章ノ格法ヲ論ジ、音調論ハ、概音調ノ節度ヲ論ズ

(上卷十四丁表・裏、十五丁表)

### Lesson 1.

- ① Language consists of articulate or spoken sounds which express thoughts.
- ② The term language is from the Latin, *lingua*, *tongue*, hence we say our mother *tongue*, or language.
- ③ Grammar is the system or body of laws and rules by which we express thought in correct language. The word is from the Greek *gramma*, *a letter*.
- ④ The rules of grammar are framed from old practice, and comparison of the writings of the best authors in the language.
- ⑤ From habit we often use many unsuitable words, and incorrect words of speech; and as dialects differ from the standard in various parts of the country, it is therefore requisite to learn grammar.
- ⑥ Grammar is usually divided into four parts : ORTHOGRAPHY, ETYMOLOGY, SYNTAX and PROSODY.



⑦ Orthography treats principally of Letters; Etymology of Words; Syntax of Sentences; Prosody of Pronunciation.

(p.p.5,6)

以上のように両書は各番号の部分においてそれぞれ対応しており、ある意味で『日本文典』は『英吉利文典』の翻訳とも言える形態である。

### 3.2.2. 「文字論」と“ORTHOGRAPHY”

「文字論」に関しては、その題目名が一致するだけで両書の内容がそのまま一致することはない。ただ項題は先に示したように、記述の順序や扱う内容そのものは一致している。これは五十音とアルファベットという表記の性質を対応関係で捉えたものと見るべきであって、互いに全く独立したのではなく、その意味でこの部分に関しては一種の翻案と考えられよう。

### 3.2.3. 「言語論」と“ETYMOLOGY”

「言語論」において両書の類似は一層強まってくる。これは『日本文典』の品詞分類があくまでも英文典の枠組みで把握されていることを意味する。つまり、その基本的な枠組みの中で齟齬をきたさないように日本語の品詞が整理されたのである。以下具体的に両書の比較を行う。

#### 3.2.3.1. 品詞分類

「言語論」

①言語論ハ、言語ノ本質ト変化トヲ論ズル者ニテ、③之ヲ大別シテ八種トス、日ハク名詞、日ハク代名詞、日ハク形容詞、日ハク動詞、日ハク副詞、日ハク後詞、日ハク接続詞、日ハク感歎詞、則之ヲ総称シテ八品詞ト云フ、

(上卷二十七丁表)

## Lesson 8.

- ① *Etymology* relates principally to words in their origin and in their variation.
- ② The word is from the Greek etimos, *true*, *logos word*, or *discourse*.
- ③ In English there are eight sorts of words, Nouns, Verbs, Adjectives, Pronouns, Adverbs, Prepositions, Conjunctions, and Interjections.

(p.11)

以上のように、『日本文典』の八品詞分類自体は英文典の影響下にあることは間違いない。しかもその八品詞分類の前提である「言語論」の定義は『英吉利文典』の翻訳と言っても差し支えない。ただ中根はこの八品詞分類に日本語を適応させるためにさまざまな工夫を行っており、まさしくその点こそ中根の独自性と見るべきなのである。それゆえにこの八品詞分類自体を中根独自の考案とみなすことはできない。

## 3. 2. 3. 2. 名詞

○①名詞ハ、・天・地・人・ノ如キ、物ノ名ヲ論ジ、(後略)(上卷二十七丁表)

○名詞ハ文章中ノ主本タル者ニシテ、(中略)②凡指シテ以名クベキ者、皆之ヲ名詞ト云フ、今之ヲ分チテ三種トス、③曰ハク普通名詞、曰ハク固有名詞、②曰ハク無形名詞、

(上卷二十七丁裏、二十八丁表)

## Lesson 9.

- ① A *Noun*, from the Latin word *nomen*, *name*, is the name of persons, places, things, qualities, or principles.
- ② The name of everything we can see or think of as existing is a

noun, and those nouns which refer to quality or principle are called Abstract Nouns, as *brightness*.

③ The names of things which we can see and called Proper or Common nouns.

(p.p.11,12)

### 3. 2. 3. 3. 代名詞

○① 代名詞ハ、・吾・汝ノ如キ、名ノ代リニ用フル者ヲ論ジ、(後略)  
(上卷二十七丁表)

○① 代名詞ハ、人又ハ事物ノ名ノ代ワリニ用フル者ニシテ、己ノ名ニ代リニ吾ト云ヒ、吾ニ対スル人ノ名ノ代リニ汝ト云ヒ、又相手ニ対シテ別人ヲ指ストキ、彼ト云ヒ、事ノ所作ヲ指シテ、是ト云ヒ、其ト云フ類ナリ、  
(上卷三十六丁表)

○今其ノ種類ヲ分チテ三トナス、① 曰ハク人代名詞、曰ハク普通代名詞、曰ハク疑問代名詞、  
(上卷三十七丁裏)

○② 凡人代名詞ニ三箇ノ所有アリ、曰ハク人称、曰ハク数、曰ハク性、  
(上卷三十八丁裏)

### Lesson 12.

① A Pronoun is a word used in place of a noun, and is so called from the Latin *pro*, for, and *nomen*, name or noun, as *-you* are good. Here I use the word *you* instead of the name of the person addressed.

(p.14)

### Lesson 26.

① There are two sorts of pronouns, personal and relative.

② Pronouns are declined with person, and with number, gender, and case, in common with the nouns for which they are used.

(p.25)

## 3. 2. 3. 4. 形容詞

- ①形容詞ハ、・高キ山・深キ川・ノ如キ、名詞ヲ形容スル者ヲ論ジ、  
(後略) (上巻二十七丁表)
- ②形容詞ハ、大抵名詞ノ上或ハ下、若クハ文中ニ在リテ、①事物ノ大小長短精粗厚薄ノ形状ヲ精密ニ形ス者ナリ、  
(上巻四十四丁裏)
- 凡形容詞之ヲ分チテ三種トナス、④曰ハク数形容詞、曰ハク尊称形容詞、曰ハク一般形容詞、  
(上巻四十七丁表・裏)
- 数形容詞ハ、物ノ数幾箇幾箇ト形ス者ナリ、今之ヲ・⑧基数・序数・ノ二ニ分ツ、  
(上巻四十七丁裏)
- 基数又之ヲ分チテ二トス、⑤曰ハク定数、曰ハク不定数、  
(上巻四十七丁裏)

## Lesson 11.

① An *Adjective* is a word which denotes a quality in natural objects, or in personal acquirements or endowments; as-a *lovely* landscape, a *great* order.

② The word adjective is from the Latin words *ad*, *to*, and *jactus*, *placed*, because it is placed to or before a noun. (p.13)

## Lesson 24.

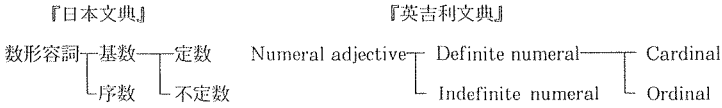
④ There are three kinds of objectives, Demonstrative, Numeral, and General.

⑤ There are two kinds of numeral adjectives, the Definite and the Indefinite.

⑧ Definite numerals are further divided into Cardinal and Ordinal.

(p.23)

形容詞の中でも数形容詞については、相違が見受けられる。



以上のように基数・序数と定数・不定数がちょうど逆になっている。おそらくこの相違は意図的な改変ではなく、中根の誤解に基づくものと考えられる。なぜならば中根は「蓋基数ハ物ノ多寡ヲ数フルヲ主トシ、序数ハ物ノ順序ヲ列スルヲ主トスルヲ以、自差別アルナリ、」（上巻四十八丁裏・四十九丁表）と定義しておりこの定義は『英吉利文典』にある“The Cardinal numbers are such as answer to the question, how many?,” “Those (the ordinal numbers : 引用者註) which denote the order and rank in a series,” というものと同ーだからである。つまりそれぞれの術語が『英吉利文典』に拠っており、その定義も同一であると共に、文法的にも「序数」は定数に含まれる性質である以上、この異同は中根の誤解に基づくというのが自然であろう。

### 3. 2. 3. 5. 動詞

○①動詞ハ、・言フ・為ス・ノ如キ、働キヲナス者ヲ論ジ、(後略)

(上巻二十七丁表)

○①②動詞ハ文章中ニ在リテ、名詞ノ働キヲ形ス者ニシテ、(後略)

(下巻一丁表)

○凡動詞中ニ数箇ノ品類アリ、曰ハク単用動詞、曰ハク重用動詞、④⑤曰ハク自動詞、曰ハク他動詞、⑥曰ハク順用動詞、曰ハク逆用動詞、曰ハク規則動詞、曰ハク不規則動詞、曰ハク助動詞、曰ハク分詞、

(下巻一丁表・裏)

### Lesson 10.

① A Verb, from the Latin verbum, a word is a word is that asserts, commands, or asks as *I will; run fast; may I go? &c.*

② A Verb indicates that persons or things do something, or are something, or have something done to them; as I *strike*-you are *hurt*, -he is *flogged*.

④ Verbs are divided into Transitive and Intransitive. (p.12)

Lesson 30.

㊦ Verbs are said to be either Transitive or Intransitive, Active and Passive, Regular, Irregular, and Defective. (p.29)

### 3. 2. 3. 6. 副詞

○②副詞ハ、・善ク言フ・悪ク為ス・ノ如キ、動詞ニ副フ者ヲ論ジ、(後略) (上卷二十七丁裏)

○副詞ハ其ノ詞独立タズ、毎ニ動詞ノ上ニ在リテ、以動詞ノ模様ヲ精密ニ形スコト、猶形容詞ノ名詞ニ於ケルガ如キナリ、今其ノ種類ヲ、細ニ区分スルトキハ、則①・作為・地位・時刻・分量・決定・非否・ノ六項ニ分ツ、(下卷二十二丁裏)

Lesson 13.

① An adverb is a word that shows manner, situation, quantity, time or affirmation and denial; as, I write *well*, -you go *there*, -he brought *more*, -you came *late*, -yes, *no* &c.

② It is called adverb from the Latin ad, to, and a verb, as may be seen in the examples just given, where the adverbs follow the verb, *write*, *go*, *brought*, and *came*. (p.14)

### 3. 2. 3. 7. 後詞

○①後詞ハ、・人ハ・是コソ・ノ如キ、他ノ語ノ後ニ着ク者ヲ論ジ、(後略) (上卷二十七丁裏)

○②後詞ハ名詞及ビ其ノ他ノ詞ニ陪シテ、以種々ノ意味ヲ形ス者ナリ、日本ニテ説話ヲ為シ文章ヲ属スルニハ、後詞ヲ用ヒザレバ、毫モ之ヲ作ス能

ハザルナリ、

(下巻三十丁表)

## Lesson 14.

① Preposition is a word usually placed before nouns, and is derived from the Latin pre, before, and positus, placed.

② A Preposition shews the connexion a noun has with other words in the sentences; as -I looked at the sun; I went through the gate &c.

(p.15)

この「後詞」は英語の前置詞に相当するものである。英語の“Preposition”に対する「前置詞」という訳語の固定は、古田(1957)の中で指摘されているように既に慶応年間に起っており、明治初期においてはその品詞名と品詞上の性格については十分把握されていた。それゆえに日本語の文典では、そのまま「前置詞」として取り入れるのには抵抗があったのだろう。確かに、明治六年刊行の『太田氏会話篇』のように、そのまま「前詞」として取り入れたものも存在しており、「前置詞」に関する認識には若干の例外も存在する。しかし大半の洋式日本文典では「あとことば」や「後置詞」というように、名称の変更がなされている。その意味では『日本文典』も、あくまでも英文典の範疇において「前置詞」に該当するものを日本語の中に見出し、それを「後詞」という品詞として定立させたいえよう。事実品詞の定義では「前」と「後」との変換によるものが多い。ただ、この「後詞」について中根は英語の前置詞以上の役割を発見している。このことは点線部の主張に顕著である。ただしそれには、田中義廉の『小学日本文典』で「後詞」も「前置詞」も認めていないことへの批判の意味も含まれていたと思われる。『小学日本文典』は『日本文典』と同じ洋式日本文典とはいえ、蘭文典を範にしたためか助詞をすべて名詞の格に含ませており、「後詞」や「前置詞」のような品詞を日本語の中で認めていない<sup>4)</sup>。

## 3. 2. 3. 8. 接続詞

接続詞や後述の感歎詞はその品詞の性質上、特に英文典によらなくとも定義は自ずと似通ってくる。それゆえにこれらの二品詞が全て『英吉利文典』に依拠したものであるとは断定できない。しかしそれまでの品詞の関係から見てもこれら二品詞だけを独立して扱うことは不自然であるため、他の品詞に倣いその異同を比較してみることにする。

○③接続詞ハ、・明クレバ則暮ル・ノ如キ、前後ノ語ヲ繋グ者ヲ論ジ、  
(後略) (上卷二十七丁裏)

○③接続詞ハ、諸詞ノ、中間ニ在リテ、前後ノ言語文章ヲ、断エザル様ニ  
続グ者ナリ、 (下卷四十一丁裏)

## Lesson 14.

③ A Conjunction, from the Latin *con*, together, *junctus*, a joining, is a word which joins sentences together, as -Victor and Charles were there. -Will you read or play? (p.15)

## 3. 2. 3. 9. 感歎詞

感歎詞については、その名称が問題となってくる。当時の翻訳では仁田氏(1982b)のように「間投詞」もしくは「歎息詞」「嘆息詞」が一般的であった。『日本文典』では「一ニ之ヲ間投詞トモ云フ」というように「間投詞」も挙げているが「感歎詞」という名称は『日本文典』が最初である。ただ「感嘆詞」という名称は『和蘭文典前編』(天保版)に既に見えており、明治四年に刊行された中金正衡の『大倭語学手引草』の中にも挙がっている。

○④感歎詞ハ、・嗚呼・曳・ノ如キ、⑤不意ニ④歎息ヲナス者ヲ論ズ、  
(上卷二十七丁裏)

○感歎詞ハ、言語文章ノ中ニ在リテ、・喜・怒・哀・楽・及ビ・罵詈・驚



駭・畏懼・叱咤・等ノ声ヲ用フルヲ云フ、一ニ之ヲ間投詞トモ云フ、⑤其ノ言語文章ノ間ニ、不意ニ投ゲ入ルハヲ以ナリ、（下巻四十四丁裏）

Lesson 14.

④ An *Interjection* is a word which expresses excited feeling, as *-hurrah! oh! dear! me!*

⑤ It is named *interjection* from the Latin *inter*, *between*, and *jacere*, *to throw*, because it is a word, as it were, thrown in suddenly.

(p.15)

### 3. 2. 4. 「文章論」と“SYNTAX”

「文章論」については、『英吉利文典』に明確なシンタクス論が触れられていない点から、両書に際立った共通点はない。「文」の構造上の種類に関しては古田（1978）の指摘のように、ピネヲ（オ）・カッケンボスの英文典では単文・重文の二種類であり、後のスウィントンの英文典で初めて単文・重文・複文の三種類が挙げられている。つまり中根が参照した『英吉利文典』ではまだこれらの種類については触れられていないため、結果として「文章論」には英文典的な要素がふくまれなかったのではないかと古田氏は述べている。それゆえに『日本文典』の「文章論」は係結びや省略といった極めて国学的な記述が見受けられる。

### 3. 2. 5. 「音調論」と“PROSODY”

「音調論」においては、中根の独創性が強く出ている。『英吉利文典』では発音におけるアクセントやイントネーションなどが述べられているが、これに対して『日本文典』では「吾ガ国ニ於キテ、首トシテ論ズベキ者ハ、・緩急・曲直・以下ノ諸韻ニシテ、（下巻七十一丁裏）」とあるように、西洋文法の通りには論じていない。また日本の歌が押韻しないことから、詩歌の音韻についても論じることはできないとしている。つまり「音調論」

は『英吉利文典』において示されたテーマではありながら、そこで論じられたものは中根が独自に改めたといえるのである。またここで述べられている論には、例えば漢字音について漢音・呉音の別を説いたり、短歌や長歌の修辞について触れるなど、中根の漢学や歌学の素養が色濃く反映している。

#### 4. 『日本文典』と『英吉利文典』以外の洋学書との関係

以上のように『日本文典』と『英吉利文典』との関係について検討してきたのだが、言語論（品詞論）に関して詳細に検討してみると、『英吉利文典』の全くの翻案ではなく適切な取捨選択がなされていることがわかる。例えば「文典大旨」において下線部以外の所は『英吉利文典』にはない部分であり、そこでは「文」と「文字」と「文法」との関係が詳しく言及されている。また名詞や代名詞の格などは、『小学日本文典』への批判をふまえながら、その存在を認めず「後詞」で処理している。しかし『英吉利文典』に該当する部分がない箇所が全て独自のものとみなすことはできない。『日本文典』では従来の国学関係書も参照されており、そのことは中根自身が「凡例」において「是ノ書ヤ、専西洋ノ文法ニ倣ヒ、其ノ言語ヲ節解スルニ由リ、一々其ノ説ニ従フ能ハズ、然リト雖モ夫ノ三子ノ功豈蔑如ス可ケンヤ」（上巻三丁表）と述べているように、賀茂真淵・本居宣長・本居春庭らの説も無視せず、部分的に取り入れている。事実「文章論」についてはかなり国学的学説が含まれている。

その意味においては『日本文典』には、『英吉利文典』以外の洋学書の影響があるとは考え難い<sup>5)</sup>。文典だけを見れば、明治初年に輸入されたT. S. Pineo “*English Grammar*”（『ピネヲ氏原版英文典』）やG. P. Quackenbos “*First Book in English Grammar*”（クワッケンボス氏『英文典』）などが存在しているが、これらの英文典の特徴は文章論の叙述にあり、『日本文典』に明確な文章論の記述がない以上、その影響関係を即断することは難しいからである。更に、L. Murray “*Abridement of Murray's English Grammer*”（『モルレイ氏英吉利小文典』）や、G.

Brown “*First Lines of English Grammar*”, “*The Institutes of Grammar*”などが明治初年には刊行されていたが、これらは確かに刊行年代は明治初年と推測できるが、全般的に普及したのが明治十年以降のことであることから、影響関係については除外できるものと考えられる。

また『日本文典』が英文典以外にも、他の洋式日本文典から影響を受けているため、結果として洋文典的な性格を有している点も見逃せない。そしてその洋式日本文典については、明らかに田中義廉の『小学日本文典』の批判的摂取が挙げられる。従来は『小学日本文典』における格の扱いを批判したという点だけが取り上げられているが、詳細に検討すれば、それ以外にもさまざまな点において影響を与えていると考えられる。

それゆえに『日本文典』と田中義廉『小学日本文典』との関係について、順に検討を行うことにする。

#### 4. 『日本文典』と田中義廉『小学日本文典』

##### 4.1. 田中義廉『小学日本文典』

以上のように、『日本文典』と洋学書との関係について見てきたが、これらの外にも洋文典的な箇所が『日本文典』には見受けられる。そしてそれは中根の独創というよりは、明治七（1874）年に刊行された田中義廉の『小学日本文典』の影響並びにその批判的摂取によると考えられる。具体的な書名は挙げられていないが、例えば名詞の格を認める点については「日本ニテハ、名詞ノ中ニ格ヲ設クルコトナキナリ（上卷三十三丁裏）」として批判したり、また動詞の不定形を認めないことなど、明らかに『小学日本文典』を意識した記述が見られる。

##### 4.2. 『英吉利文典』にない品詞名

『日本文典』には、『英吉利文典』では挙げられていない品詞が存在している。そしてそれらの大半は『小学日本文典』に挙げられているものである。以下『英吉利文典』との関係から三品詞を挙げてみる。（○印は

『英吉利文典』に挙げられているものを示す。)

	『日本文典』	『小学日本文典』		『日本文典』	『小学日本文典』
代名詞	○人代名詞	人代名詞	動詞	単用動詞	
	普通代名詞	疑問代名詞		重用動詞	集合動詞
	疑問代名詞	復帰代名詞	形容詞	○数形容詞	数形容詞
		指示代名詞		尊称形容詞	
		不定代名詞		○一般形容詞	

ここで見るように『英吉利文典』にない品詞であっても、その多くは『小学日本文典』で挙がっていることがわかる。例えば『英吉利文典』にはない疑問代名詞が『日本文典』では措定されているが、これは『小学日本文典』ですでに措定されたものである。また動詞の下位分類で『日本文典』では単用・重用の区別をしているが、これは『英吉利文典』にはなく『小学日本文典』にある「集合動詞（複合動詞に相当）」の定義に倣ったものと思われる。しかし『小学日本文典』にはない部分で、例えば形容詞に尊称形容詞という、尊敬の接頭辞を認識していた点などは中根の独創といえることができる。

#### 4.3. 『小学日本文典』の批判的撰取

『日本文典』では『小学日本文典』について、格や法の措定以外にも批判している部分がある。つまり『小学日本文典』において不適切と考えられた部分が、『日本文典』ではかなり広範囲にわたって意識的に改められており、その意味で批判的撰取がなされたといえるのである。具体的には接続詞と感歎詞において顕著である。『小学日本文典』では、接続詞は「合連・決定・原因・位地・区分・反対・設有・取捨・説明」と、感詞では「歎喜・悲哀・驚嘆或は感慨・忿怒・鎮止・勸励・賞讃・希望・招呼・発祥及び哭泣」というようにそれぞれ下位分類を行っているが、これについて『日本文典』ではこのような分類を行っていない。中根は、例えば感

敷詞についてはこのように強いて分ける必要はないとして退けているように、明らかに『小学日本文典』を意識した叙述であることがわかる。

## 5. おわりに

洋式日本文典に関しては現在までにさまざまな言及がなされてきたが、単に西洋文典の模倣という言葉で、具体的に何を依拠したのかという点については古田氏の指摘以外には全くなかった。今後はその依拠した文典との相互関係などに注目することで、斬新で実証的な視点が、洋式日本文典に対して提供されるものと考えられる。本稿はその視点を提供するための一指針であり、洋式日本文典に対する正当な評価を与えるための試みでもある。そしてその正当な評価付けについては今後の課題である。

## 註

- 1) 古田(1958)などに、洋式日本文典の原典についての言及がある。また日本文典と洋文典との関係については、服部(1989)参照。
- 2) 福井(1934)の記述による。
- 3) 例えば工藤(1993)では、洋式日本文典があまり積極的に評価されていないが、これは参考文献の一つに挙げられた山田孝雄の影響かと思われる。
- 4) 田中義廉『小学日本文典』の原典が蘭文典の『和蘭文典前編』であることは、既に古田(1959b)で指摘されている。
- 5) ただし洋学書の場合はその原典を参照したのか、それともその翻訳に拠ったのかどうかは特にその両方が当時において入手可能な場合、厳密には詳らかにできない。このことについて古田(1978)においても即断を避けている。

## 参考文献

- 工藤 浩(1993) 「日本語学史」工藤浩他『日本語要説』ひつじ書房  
 此島 正年(1976) 『国語学史概説』桜楓社  
 新保磐次編(1916) 『香亭遺文』金港堂書籍

- 鈴木 一彦(1976) 『日本文法本質論』 明治書院
- 仁田 義雄(1982a) 「明治初期の洋式文典における品詞分類」『京都教育大学紀要』  
60号
- 仁田 義雄(1982b) 「初期欧文典・辞書に現われた品詞名」『京都教育大学国文学会  
誌』17号
- 服部 隆(1985) 「明治前期における国文典の問題」『上智大学国文学論集』19号
- 福井 久蔵(1907) 『日本文法史』 大日本図書
- 福井 久蔵(1934) 『増訂日本文法史』 成美堂書店 (1981, 国書刊行会)
- 古田 東朔(1957) 「洋文典における品詞訳語の変遷と固定」『香椎潟』3号
- 古田 東朔(1958) 「日本文典に及ぼした洋文典の影響」『文芸と思想』16号
- 古田 東朔(1959a) 「中根淑『日本文典』の拠ったもの」『解釈』51号
- 古田 東朔(1959b) 「田中義廉『小学日本文典』の拠ったもの」『解釈』5巻3号
- 古田 東朔(1959c) 「中根淑」『実践国語』20巻231号
- 古田 東朔(1978) 「中根淑のこと」『日本の言語学三 文法』月報 (大修館書店)
- 山田 孝雄(1908) 『日本文法論』 宝文館
- 山田 孝雄(1935) 『国語学史要』 岩波全書
- 山田 孝雄(1943) 『国語学史』 宝文館

付記：本研究は日本学術振興会の研究助成による研究成果の一部である。

さんとう いさお (博士後期課程学生)